

442

高田江野
砂村口如

一

東 京 圖 書 館					
二 二 冊	二 號	四 七 架	函	音 樂 類	和 書 門

074933-001-5

特42-442

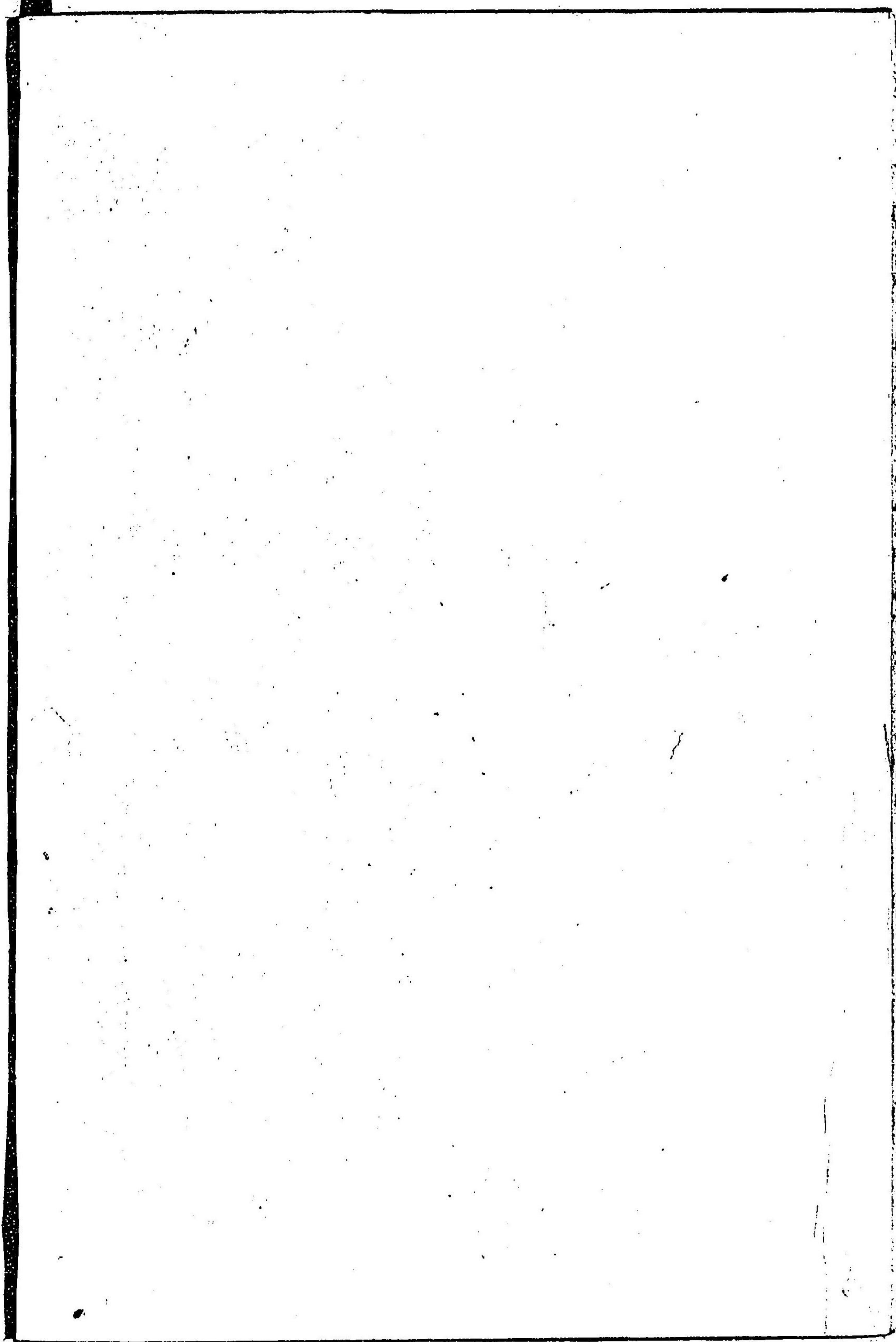
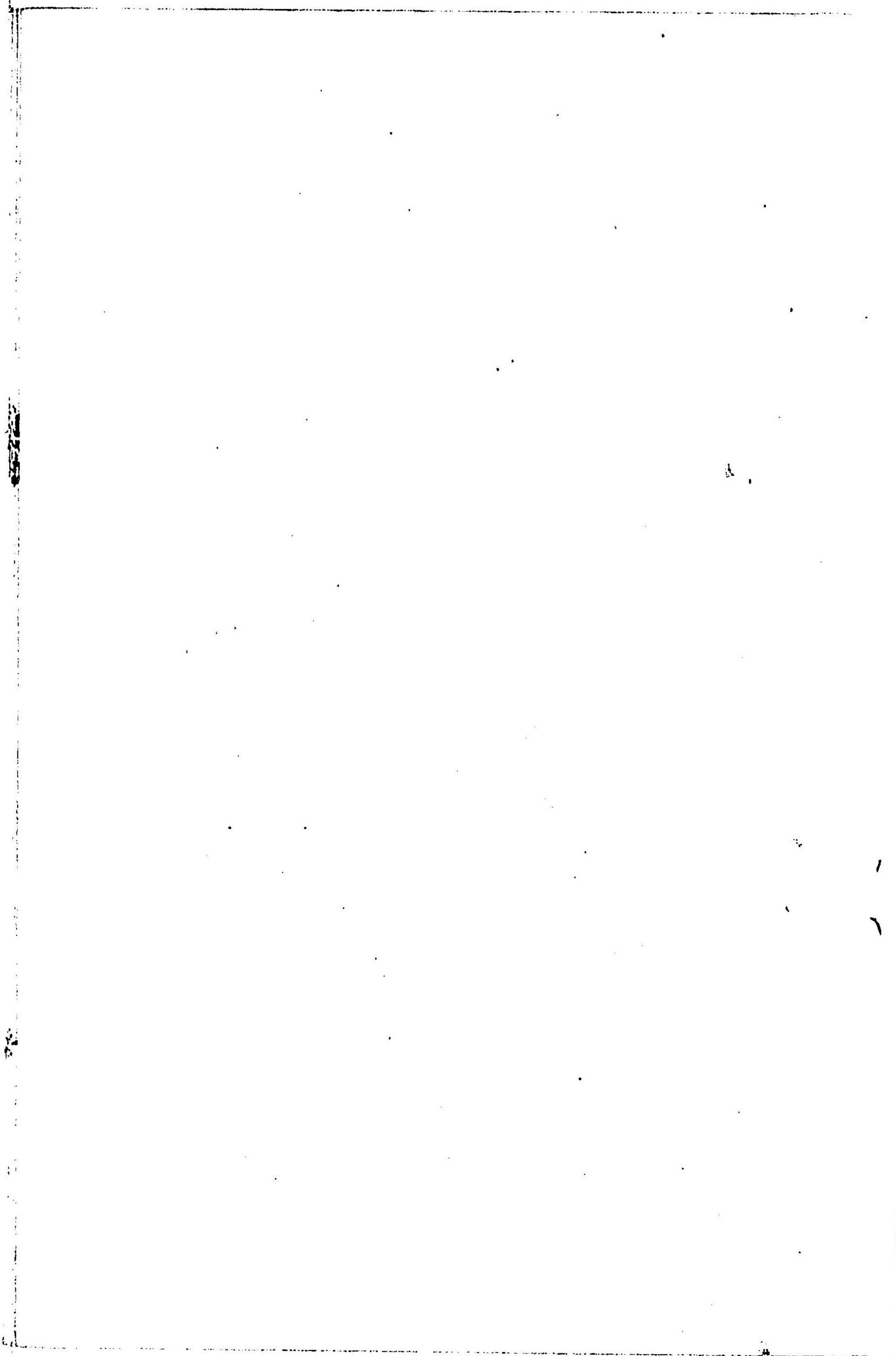
[觀世太夫織部章句真本]

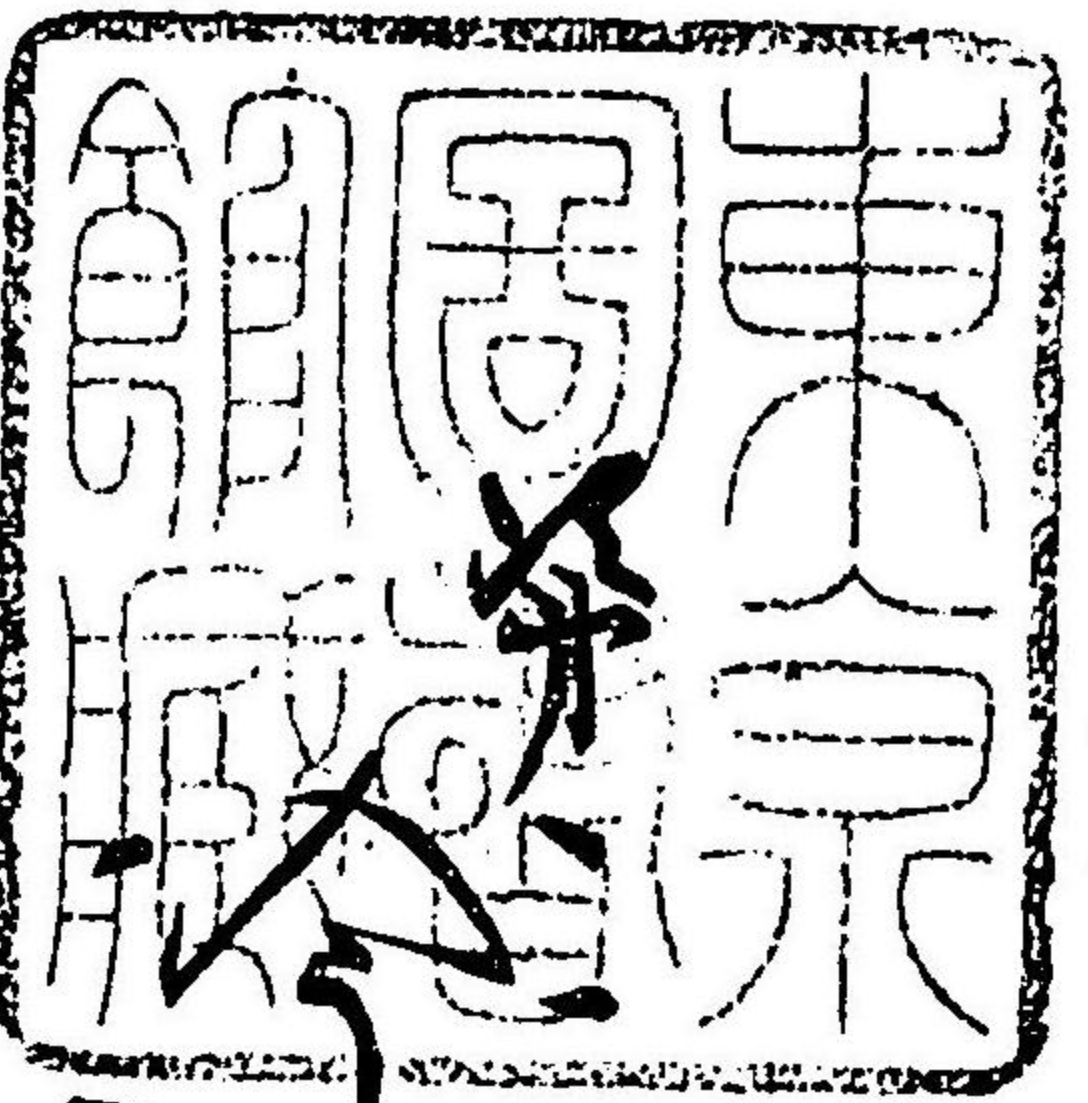
寺田熊次郎

M17

CEL-0130







高砂

了久し^平始の^平様^平衣^平く^平目^平も^平行^平も^平結^平

其國阿彌の言の神主友成と及

我事也我の都と云ふ人

此度思ひ云ふ人

此の言の播加を友の浦をも一見

きりもとむる様長来たるは
 都路さびくま思ふ浦の浪
 舟路長閑の書もはるかに
 跡事さびく自雲のさびく
 思ひ播磨の浦の浦の
 まりく高砂の松の書
 吹くわて尾よの鐘も響あり

世に流るる松の書もはるかに
 波の震れ儀かくれ書もはるかに
 此の書もはるかに松の書もはるかに
 の松も昔の友ありては書もはるかに
 志す書も積りては若乃鶴松
 舟路長閑の書もはるかに
 起る書も松の書もはるかに
 如く書も松の書もはるかに

上音信の松よとと浦内の落葉を

袖よりと木陰の塵をよみく

上可き高砂の尾よの松を年

ついで若乃の葉よりうらむを

下陰の落葉のなる命あつて

和らげまじかしの松をく久し

名前のく果入を坊屋よ若人

芝居の葉をくつは真の若人の壽

ぬい事乃作はあつてささく

作の行をよみそ高砂乃松と

付まの葉をよみ今木陰を

清めの社を砂乃松とて久高砂

佳乃江の松よ相まの各あつて南

信きく國をくたふ行をてお

生乃松と云ふ事なり 三 松乃松

古今の世序より高砂位の位乃松也

相生乃松より生しとありと云ふ事あり此

射の津の國住古乃者是人成りて

當前乃人あれ 甲 事ありと云ふ事

給へ 甲 事ありと云ふ事 乙 事ありと云ふ事

一可より有ちし事ありと云ふ事あり

浦山國を隔てて 三 事ありと云ふ事

事 三 事ありと云ふ事 乙 事ありと云ふ事

萬里を隔てて 三 事ありと云ふ事

事 三 事ありと云ふ事 乙 事ありと云ふ事

事 三 事ありと云ふ事 乙 事ありと云ふ事

事 三 事ありと云ふ事 乙 事ありと云ふ事

事 三 事ありと云ふ事 乙 事ありと云ふ事

高砂の地は早稲の地なり
 長岡の地は上野の地なり
 浪高の地は國を治する時津風極
 めるぬ法代あるは相守乃
 松より出てたうりまねるやある
 下へてはる農やあるはよきある民
 して豊ある君の惠より有秘之
 初早稲くも初乃松の目出なる謂津物

清久クリ地草木ありとハトとも
 花の時は陽を徳とし
 南枝花はさしひか
 松の地は早稲の地なり
 花の時はさしひか
 下へてはる農やあるはよきある民
 して豊ある君の惠より有秘之

高砂の松の葉の露の
 玉の光を照らす
 風の聲は水邊に
 響く
 松の葉の露の
 玉の光を照らす
 風の聲は水邊に
 響く
 松の葉の露の
 玉の光を照らす
 風の聲は水邊に
 響く

高砂の松の葉の露の
 玉の光を照らす
 風の聲は水邊に
 響く
 松の葉の露の
 玉の光を照らす
 風の聲は水邊に
 響く
 松の葉の露の
 玉の光を照らす
 風の聲は水邊に
 響く

芳人の曙かきく霜きとまとも
 松の枝の葉も同く深きものまよる
 陰の切夕影けを落せぬあまきぬ
 雲あり松の影を散らす勢として
 色も松の葉もあつた毎のまよる
 ゆきもまよるまよる中も名もまよる
 雲も代りたぬまよる相まよる松もあ

てたま^上まよるまよる松の枝の
 若木乃首ありまよる其まよる葉
 ぬくや^上今まよるまよるまよる
 まよる住乃の相まよる松の精もまよる
 現^上まよるまよるまよるまよる
 乃松の葉もまよるまよるまよる
 まよるまよるまよるまよる
 まよるまよるまよるまよる

本ヨき 日ニ 我ニ 大君の國ニ あり 建ル 國ニ あり 國ニ あり

君ノ 代ニ 好シ 信ニ 寄ル 事ニ あり 行ク 事ニ あり 事ニ あり

御ノ 事ニ 已レ 事ニ あり 事ニ あり 行ク 事ニ あり 海ニ あり 事ニ あり

中ノ 舟ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり

仲ノ 方ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり

高ノ 砂ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり

月ノ 渚ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり

事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり

事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり

事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり

事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり

事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり

事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり

事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり 事ニ あり

夏ニのハ浪ハまハよリりハ ありハらハれハしハぬハ 神松ノ
雲ハまハたハりハもハちハあハらハむハのハ朝ハかハつハ
たハまハもハうハむハあハらハむハ陰ハのハ 松根ノ
よハうハくハ腰ハをハたハれハらハ 五年ノ緑ノ
手ハよハこハりハ 梅花ハをハ持ハつハかハらハふハ
こハまハ 二月ノ雪ハをハちハりハつハ 有ハ縁ノ
乃ハるハりハかハもハぐハくハ月ハ佳ハしハ乃ハ非ハ遊ノ

いハはハ歌ハをハあハらハむハあハらハむハたハまハよハ 孝ノ
まハあハくハ乃ハ舞ハ姫ハのハきハもハ澄ハりハのハ信ノ
つハえハ乃ハ松ハかハまハもハうハつハるハあハらハむハ青ハ海ノ
波ハのハ是ハ山ハ流ハ 非ハ君ハのハ道ハもハ
まハまハあハらハむハのハまハもハうハつハるハあハらハむハ
雲ハ城ハ樂ハ乃ハまハもハうハつハるハあハらハむハ
小ハ泉ハ衣ハ 乃ハあハらハむハあハらハむハ思ハ摩ハをハ

ころひたさしる手よの壽福をらひ
 多岐よの民をたむく萬壽樂よの命
 とう相まの松月觀との聲そた
 かしきく

田村

第 鄙女劫路陽て舞とく九重
 乃まよ急うを 是東國方
 よるおたたる僧とく。新未都を

乃の作箱よ此ま思のまて作
 ちあらろそたや海生あうまの春乃
 ちづくまも長岡よあうる目れ

霞トモしき方トモや音羽山トモ籠乃トモ郷トモも秋
成清妙寺トモのトモきりくトモ 刻トモ

野トモの都清妙寺トモとトモカドトモきん

是成梅乃トモ感トモとみトモて人トモと依トモて妻

等トモのトモ思トモのトモ村トモのトモきりくトモ

向トモと成トモよトモまトモりトモ地主トモ権現トモのトモ花トモはトモるトモ

久トモ花トモのトモ可トモ打トモまトモとトモ入トモ思トモ入トモ悲トモ

つトモきトモしトモこトモしトモしトモ故トモうトモ洪トモ寺トモ乃トモ地トモのトモ

櫻トモよトモ志トモくトモきトモあトモらトモまトモりトモもトモやトモ久トモ慈トモ大トモ

悲トモ乃トモきトモのトモ花トモ十トモ聖トモのトモ里トモのトモうトモりトモをトモ三トモ

十三トモ乃トモあトモのトモ月トモ五トモ河トモのトモ水トモよトモ敷トモ

法トモ子トモ早トモ振トモ非トモのトモ中トモ庭トモ乃トモかトモのトモ

あトモのトモ白トモ多トモ志トモよトモ雲トモもトモ霞トモもトモうトモりトモ

まトモれトモてトモ竹トモきトモ梅トモ乃トモ梢トモをトモたトモかトモんトモ渡トモ

本寺へ言まは九重の事なり
 又まの事ありて
正白 正白
 勢多の如く
正白 正白
 尋中人の事なり
 何れも
正白 正白
 玉の事なり
 君等も
正白 正白

地を指現はは申者ありつらも花の
 比き花陰を清めり
 是に
 者
 先を當寺の寺
 柗當も清妙寺と
 乃由是釘坂の上乃田村凡の寺教也

昔大和國小鳴寺と云可よきんを
 せしむれ沙門云牙乃觀世音をたつ
 まんと極きひくよ。有村こつひ乃ひよ
 たりへ書ぬ乃きりきしと尋登の
 てんれひ一人の老翁ありは翁語
 くらしく我き是行敷店をといり
 此一人乃檀那とまらうだ伽藍を建

きまへしとて東をけしといひまぬ
 ざれ行敷店をいつても是釈多隆
 壇乃は每誕ま檀那跡まくと有
 是坂乃上の田村丸 今き其
 名は遠きたる清次乃く深子捨
 ちねとよか手のか手ぬらうく様
 乃ちらひ普くて美國ス萬民をいふ

先と見社は傍くさあ見
 是く之暇打きれとあ見
 一時 文惜母く 打き入る
 去宵一刻價又金花は清音月よ
 如け まよ平今金もく 今
 此時うや 甚く雷の地ま入萃の
 勢ふやあ桜のいよまよまの日のま

乃書りやまよ母やま 糖ひ青陽の
 陰みよりまよ内長雨あ音羽乃流若
 自急乃くくりまよ 面白や有
 上レ 郊地ま控現の荒れまよあり
 頼り標帯う直入れもまよ 秋等中

田村堂へ行くも。目のむらさきと押あ
 まり。さらしや入るも。まきの陣よ入を
 給ひまう。 早上 あり。教を授け乃陰
 小舎へ。花をたえあるは乃場
 味もあ月のあさ。此は經と讀誦
 とも。 下 あり。有難乃所經やお
 清水寺の齋律儀。まこと一行為流と

何く。他まの縁有核人よ。まきと
 疾色乃漢。爾是。則大義大悲乃
 觀音擁護乃。結縁た。 早カ あり。まき
 お花のまう。あま。男孫の人
 乃。まき。あま。成人ま。まき。あま
 今。行。ま。仁王五十一代。平城
 天皇乃。ま。有。坂の上乃。田村丸

東夷とさるるを悪魔と志す。天下
 泰平の忠勤たるも、別當寺の仏力也
 歟。君乃宣旨よ、勢のまじり
 ありませと志す。都鄙安んずるを
 人の信よとく軍兵と調へ、既よ教く
 次第よまゝつて、此観音の宗よまゝり
 祈念するに、立教まゝり、かゝるる

瑞雲ありたあれ、歡喜微笑の頼を
 せむとく、家まの使よ、むさく、普天
 乃下率去のや、く王地ありせんや
 頃てあり、竹園の戸はく、あまら
 じと、いふまじり、ぬる、業津乃森や
 かきろもの名と、寺せ、たり、皇も
 清水の一佛と、頼あり、の、口路を

勢田の長橋のあし 効て乞たむ
 いまも 既よ伊勢路乃山ちりく
 弓馬乃道もきうきんしうつるさしみを
 みる梅うさみの花もあはれもさしめして
 たまひのさあしうなつ去も才を裁大
 君乃邦國 観音の法起音
 仏力とひ邦力とあしむるまじり

ねうまうつとらきうてさきうの
 乃みうさきしんまも思入の佳句
 ある 去程よあしと勤うの鬼
 神乃事し夫よひの地よ満て萬才を
 勤攘さう 鬼邦も落よ

毛も昔もまたあしむるさしめ
 一筆に女一筆に信を

天討よりちと松の原さびしき

そりせれもまらもまらかの鈴鹿山

振敷振まれの伊勢の海あの松原

村立村まのま鬼神まの黒雲鉄火まを

みみつつ敷子敷孫孫よよ方方ととままししてて山

乃乃くくよよみみししききるる風風をを別別れれをを

みみよよううままももああまま味味方方乃乃軍軍兵兵の

旗旗乃乃よよ敷敷千千手手観観音音乃乃ええをを叙叙つつく

虚虚乃乃よよ家家行行刻刻千千れれはは手手毎毎人人悲悲

乃乃りりよよ敷敷音音東東乃乃矢矢ををままああてて一一度度を

ああままのの千千ののちちををはは雨雨ああれれととししりりののく

つつてて鬼鬼林林れれししるるよよ乱乱是是落落札札ののままをを

くくをを矢矢先先乃乃かかつつてて鬼鬼神神ののままをを

ままたたああれれよよままりり有有難難りりくくやや城城乃乃

呪咀諸毒藥會似觀音のちりきり
 ありてせりともありて還着於本人則
 還る於他人乃敵き亡びたり
 是觀音慈悲力あり

江口

第...

月をしりて雲をあらはく世乃
 ちりきりありて
 是も諸國

一見此僧をして作我の津乃國
 天王寺よしありて此度思ひ

立ち玉寺よしありて思ひ作
 都をばりて夜深きよ核立ちてく

度れり每行来りしこの声響は
乃たえり位下松乃煙の浪よまるとは口
表位下里よるよきりく甲サレ ねは是
あつは口乃君の舊跡もや痛り
や其方に出平よ押せとらん名
とまりて今夜も昔のり乃旧
節位下の風みよりのまはよま位下ち

西行法師此可しくおの言せり
きねよあつとあつとあつと
なつとあつとあつとあつと
とつとあつとあつとあつと
可まへの事あつとあつとあつと
登位下休位下 あつとあつとあつとあつと
乃手さる行と思ひつとあつとあつと

さし給ふ可しやまゝ入家せ

かゝるめまゝつゝも時一人集つて

しつ詠ひ多き人かゝるて

とつを給ふるもも行故よ事よ

^廿言ひく年を時も思ひつ言

の葉乃上あゆつもまねく露乃世

とよけいんささつあつあつ

惜しむの思ひもさつし

るの思ひもさつし

あつあつ半あつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あゝ入道女白も世に
あゝ女白も

あゝ入道も世に

あゝ入道も世に

あゝ入道も世に

あゝ入道も世に

あゝ入道も世に

あゝ入道も世に

甲

あゝ入道も世に

あゝ入道も世に

あゝ入道も世に

あゝ入道も世に

保

あゝ入道も世に

52

5

流し惜まぬ假乃宿ありき
も惜しき浪の裏うねりあり
今もても。捨人乃世語よ。あ
りたし。う。実やう。世乃物語
ま。ま。女。も。た。そ。う。か。ま。う。人
ま。ま。女。上。か。ま。う。か。ま。う。ま。ま。
歌。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。

女。好。口。乃。流。し。の。ま。ま。の。ま。ま。
ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。
宿。乃。梅。の。た。ら。ま。の。ま。ま。
男。乃。あ。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。
陰。乃。音。乃。ま。ま。の。ま。ま。
水。乃。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。

君の幽き声のしるしをよ

きりく 早高 毎の口の君の幾き

君の顯き秋の夜をくまら

た吊るく 上高 ことく 上高 ことく

なす 上高 月をみ渡す

水子 上高 舟をひ月を

き 上高 田原はく 上高 舟を

りて 上高 露の良き舟を

草 上高 あらう 上高 舟を

は 上高 浦 上高 舟を

後 上高 唐土 上高 舟を

の橋 上高 舟を

を 上高 舟を

か 上高 舟を

昔はあはれに思ふはる
影も棹もこぼれぬ
秋の風もあはれに思ふ
はるはるはるはるはるはる
昔はあはれに思ふはる
影も棹もこぼれぬ
秋の風もあはれに思ふ
はるはるはるはるはるはる
昔はあはれに思ふはる
影も棹もこぼれぬ
秋の風もあはれに思ふ
はるはるはるはるはるはる

誰人もあはれに思ふはる
影も棹もこぼれぬ
秋の風もあはれに思ふ
はるはるはるはるはるはる
昔はあはれに思ふはる
影も棹もこぼれぬ
秋の風もあはれに思ふ
はるはるはるはるはるはる
昔はあはれに思ふはる
影も棹もこぼれぬ
秋の風もあはれに思ふ
はるはるはるはるはるはる

てあやしくもなすをばとてかたじけなくして
ナリ人の身をたもたふにはあはれなからず

ぞとていふもよからずとてかたじけなくして
ナリちりちりたててよきもよからず

十二因縁の流れては車れはなすは
ナリかたじけなくもよからず

身をたもたふにはあはれなからず
ナリかたじけなくもよからず

さよとていふもよからずとてかたじけなくして
ナリちりちりたててよきもよからず

身をたもたふにはあはれなからず
ナリかたじけなくもよからず

さよとていふもよからずとてかたじけなくして
ナリちりちりたててよきもよからず

身をたもたふにはあはれなからず
ナリかたじけなくもよからず

さよとていふもよからずとてかたじけなくして
ナリちりちりたててよきもよからず

身をたもたふにはあはれなからず
ナリかたじけなくもよからず

さよとていふもよからずとてかたじけなくして
ナリちりちりたててよきもよからず

身をたもたふにはあはれなからず
ナリかたじけなくもよからず

さよとていふもよからずとてかたじけなくして
ナリちりちりたててよきもよからず

あゝ向行の境をみればあはれなる
 舟の動はる思ふも涙も悲しき
 紅花の花まひりし紅錦繡の山粧を
 あひのみえし夕の月よさらけ紅
 紫の秋乃夕黄顔顔れ杖のまはり
 とく丸胡の雪よるるカサ月
 よ詩よらるる廣客もなりしあはれ

あゝ翠帳紅圍の柳をあはれし妹背
 さらしりまよひし花よそひあ
 りたはれ情あはれ人輪花のまはり
 多しもの上女たはりまはり
 時にかよひし花乃思ふ清く
 あはれ花色花なる愛執の花なりし
 可し思ひの花まはりまはり縁にあはれ

花の塵の境の根の

羅をつらまきかたこと園子

来よと詠あるや

女上 冥相無漏の大海の五塵六欲の風

下 女 娘の心も重随縁を其の波の

目もあ

ゆ今假あるや

上 女 花のたつた

花のたつた

花のたつた

花のたつた

下 女 花のたつた

花のたつた

花のたつた

花のたつた

花下白
雪とありきれ海に白家とあり
つぎのちも白妙れ白雲より
下あく西の空よりぞ行く有難く
花はあもあもくくくくあはれ

和女

和女
か様よ作者の羨濃國野上も言
長あ〜。梅も我花子と上臈と
持ま〜。き〜。く〜。く〜。き〜。の〜。を
こよりの吉田の少将殿とあはれ
れ東へはらり給。此言は言はぬ
く彼花子と何い。古舞のあはれ

扇と名替へはりりるひりより花
子扇よ詠入園よりあよちよむすき
作程よ彼入よひちし屋ちらひ
と思ひのちよ花よと白よりちよ
とちよひりすひりちよ行方
とちよひりすひりちよ行方
世とちよひりすひりちよ行行

乃流のちよちよちよ行
急もちよちよちよ行
まちよちよちよちよ行
あちよちよちよちよ行
ちよちよちよちよちよ行
ちよちよちよちよちよ行
是くちよちよちよちよ行

わが國の國に於ては東よりの

秋の風は涼しく、春の風は暖かく、

都の空は青く、山は高く、

川の流は速く、海は深く、

山の峰は高く、谷は深く、

國の土は豊か、民は勤め、

わが國の國に於ては東よりの

國野上りの音は、

秋の風は涼しく、

春の風は暖かく、

都の空は青く、

山は高く、

川の流は速く、

海は深く、

乙上きくしあそくや付人。名同程
 あく都より名て人。我富願乃子細
 あまは。皇より真よたて人しあらぬ
 せふさへくさくきく事く人
百廿二 百廿二 百廿二
 乃おとさくやもくまててきくさく人。草乃是
 けうよあそくしあもまらぬ人
百廿二 百廿二 百廿二
 世次の目よ重なる目ふまきく女。世々
百廿二 百廿二 百廿二

内百廿二の使あそくさくさくさく人
 もち百廿二グア書入るもの旗手よあそ
 ぶ百廿二くさくさくさくさくさく人
 たつ百廿二くさくさくさくさくさく人
百廿二 思ひよさくさくさくさく人
 箱根玉澤嶋。貴布衣や三輪乃月
 神余。女男女のあそくさくさく人

母の心は人の心より重く
 父の心は人の心より軽し
 母の愛は人の愛より厚く
 父の愛は人の愛より薄し
 母の涙は人の涙より苦く
 父の涙は人の涙より甘し
 母の口は人の口より甘く
 父の口は人の口より苦し
 母の手は人の手より細く
 父の手は人の手より太し
 母の足は人の足より小く
 父の足は人の足より大し
 母の心は人の心より静く
 父の心は人の心より騒ぎ
 母の愛は人の愛より静く
 父の愛は人の愛より騒ぎ
 母の涙は人の涙より静く
 父の涙は人の涙より騒ぎ
 母の口は人の口より静く
 父の口は人の口より騒ぎ
 母の手は人の手より静く
 父の手は人の手より騒ぎ
 母の足は人の足より静く
 父の足は人の足より騒ぎ

母の心は人の心より静く
 父の心は人の心より騒ぎ
 母の愛は人の愛より静く
 父の愛は人の愛より騒ぎ
 母の涙は人の涙より静く
 父の涙は人の涙より騒ぎ
 母の口は人の口より静く
 父の口は人の口より騒ぎ
 母の手は人の手より静く
 父の手は人の手より騒ぎ
 母の足は人の足より静く
 父の足は人の足より騒ぎ
 母の心は人の心より静く
 父の心は人の心より騒ぎ
 母の愛は人の愛より静く
 父の愛は人の愛より騒ぎ
 母の涙は人の涙より静く
 父の涙は人の涙より騒ぎ
 母の口は人の口より静く
 父の口は人の口より騒ぎ
 母の手は人の手より静く
 父の手は人の手より騒ぎ
 母の足は人の足より静く
 父の足は人の足より騒ぎ
 母の心は人の心より静く
 父の心は人の心より騒ぎ
 母の愛は人の愛より静く
 父の愛は人の愛より騒ぎ
 母の涙は人の涙より静く
 父の涙は人の涙より騒ぎ
 母の口は人の口より静く
 父の口は人の口より騒ぎ
 母の手は人の手より静く
 父の手は人の手より騒ぎ
 母の足は人の足より静く
 父の足は人の足より騒ぎ

うらやまの影もあつた
おのれもあつた

おのれもあつた
おのれもあつた

おのれもあつた
おのれもあつた

おのれもあつた
おのれもあつた

おのれもあつた
おのれもあつた

おのれもあつた
おのれもあつた

おのれもあつた
おのれもあつた

おのれもあつた
おのれもあつた

おのれもあつた
おのれもあつた

おのれもあつた
おのれもあつた

おのれもあつた
おのれもあつた

おのれもあつた
おのれもあつた

おのれもあつた
おのれもあつた

おのれもあつた
おのれもあつた

されもたあ 夢の命のたむらひも
 とくし草の露のまも 比翼まき理
 のかこひま 穰山官の私語も
 笑ひてとく世に漏ら 気まきて
 も秋葉の秋よりまき 夢のこころ
 タの教の言あれとあし 言感の人
 頼めてくれぬ 頼りもたむらひも
 頼り

まきつらて 夢のたむらひも
 夢の言の教のあし 山あり
 おもあのおれとあし 音信のたむらひ
 まきつらて 夢のたむらひも
 下あても 夢のたむらひも
 風のたむらひも 思ひも 夢のたむらひも
 まきつらて 夢のたむらひも

あつたよ下女あや下女多形カサ人の扇カサよりく
 ずカサあつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女
 慈らきあつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女
 あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女

あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女
 しく下女あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女
 祝女あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女

あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女

あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女

あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女

あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女

あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女

あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女

あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女あつたよ下女

吉長

言あるよふに家もあつた人の言の盛と
 らん。そのきり下りし色はあのみ
 うれしおがくもさるあはれ
 上母 かくそのお行乃たきり夕暮の月
 を出きぬ森の繪乃あつらひ
 上夜 きてけのほためさるね
 よや白露乃草の如く乃松ぬ

下母

野

きりつあはれなるあはれ
 東路の末乃松山浪
 らん。そのきり下りし色はあのみ
 上夜 かくそのお行乃たきり夕暮の月
 を出きぬ森の繪乃あつらひ
 上夜 きてけのほためさるね
 よや白露乃草の如く乃松ぬ

上

形

女上

上夜

持てこのあはれ
 上夜 かくそのお行乃たきり夕暮の月
 を出きぬ森の繪乃あつらひ
 上夜 きてけのほためさるね
 よや白露乃草の如く乃松ぬ

上夜

上夜

持てこのあはれ
 上夜 かくそのお行乃たきり夕暮の月
 を出きぬ森の繪乃あつらひ
 上夜 きてけのほためさるね
 よや白露乃草の如く乃松ぬ

一、ほのぼのの文敷の花と云たる扇あり
 二、此は六叶花よ志きくめ
 三、扇は後人きよまようれしと云はれ
 四、白雲乃扇の書り世を紅くもま
 五、かろし情をこしく

鶉飼

是は女房をよまよまよと云はれ
 解白

一、借るてい、我未甲斐國と云人の行
 二、此度甲斐玉行勝と云人の行来
 三、いつと云く、女の女房の清きさ
 四、三浦のつらり鍾金山 為りきりて
 五、めろ様法をくまらつてあはれも

ガ、^下おさのね草（下）蓬鐘と松の上

よきくづの郡の朔きも目たきて

こから着たさして（下）まよ

きりく（下）鶏舟まよの無火乃

後ろおさのね草（下）サレ

中さく思ひまよ（下）夏は鶏しよの

夏は鶏しよの（下）夏は鶏しよの

月お誓ひ（下）月お誓ひ

目お誓ひ（下）目お誓ひ

目お誓ひ（下）目お誓ひ

目お誓ひ（下）目お誓ひ

目お誓ひ（下）目お誓ひ

目お誓ひ（下）目お誓ひ

目お誓ひ（下）目お誓ひ

まぬ身のわきくさるを非を
くゆまきさるもの良向の務。母に人々見
行めたげたぬ命つこもてからかあ
つひのたもまへくまへくまへくは堂
まありの鶴さやまもさあまてか
是ハは女の入るは入るま^早はは
まる僧まへくまへくまへくまへく

禁制のせやらのめは母は尊い
ての^レまへくまへくまへくまへく
者きまへくの^早母まへくまへく
まへく渡りまへくまへくまへく
まへくまへくも母の指の母は尊い
まへくまへく鶴まへくまへく
人まへくまへくも見まへくまへく
早後群まへく

夕... ^下 夕... ^上 鴉...
 ... 此... 投... 面白...
 ... 毎火...
 ... ^カ ...
 ... 靴...
 ... 腰...
 ... 籠...

... 鴉...
 ... 暗...
 ... 路...
 ... 威...

法の如經と一石よ一字なりきく。後同
 は沈め吊らう。有りうらう。ぬけらるる
 まつ。早番。地獄をまきよあつ。眼
 前の境界。雲霧のよあ。柞かの者
 多。卒の昔うら。位けは。漁つてまう
 ち。き。く。し。ち。ま。く。鏝。札。う。の。て。書。一
 へ。議。ま。う。ら。う。も。な。く。同。の。度。よ

障罪せしむる一僧一富うら
 ち。く。の。雲。の。た。か。ら。ま。う。ら。う。と
 雲霧のり。か。う。ま。き。て。持。ま。く。と。ら。う
 船よあ。は。華。の。は。法。の。助。を。舟。の。ら
 火も。字。よ。ま。き。ま。う。味。の。た。ま
 ち。雲。も。相。の。何。あ。く。あ。て
 上。地。の。外。も。雲。の。わ。く。真。の。月。や

出ぬし

サ上

ヲ入る事

其の事衆人を以て可なり

其瑞相のありたは

法華の利

善しとて諸魔の所を

すべし

實有疑時

此の事

此の事

此の事

此の事

此の事

此の事

此の事

此の事

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

他を考へくゝき力ありく

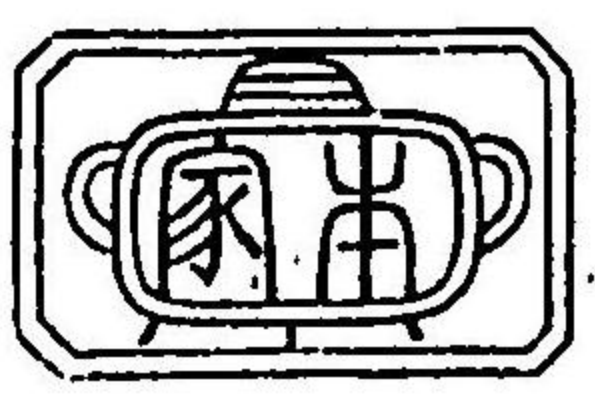
右之本者觀世太夫織部
 章句真本令放行畢

正徳六丙申歳弥生

天保十一庚子歳孟春改正再板

皇都二条通御幸町西江入町

山本長兵衛



明治十七年九月六日翻刻御届
同 年同月廿八日刻成發兌

翻刻人

京都府平民

寺田熊次



下京區第五組麩屋町

錦小路五梅屋町十三番戶

